

＜若手の会＞活動報告

日本家政学会若手の会は1996年に発足し、今年で20年目を迎えた。本年は「(祝20周年) 記念講演 - 家政学の魅力を紹介 - 」と題し、講演会を企画した。第68回大会(金城学院大学)の5月29日(日) 9:30~11:00に開催され、参加者は30名であった。

本企画は、若手の会発足20周年を記念して、各分野の若手研究者の研究紹介などを通して、参加者とともに改めて家政学の魅力を見つめ直すとするものである。住居分野からは、大分大学の川田先生から、ご自身のプロフィールをご紹介いただいた後、大学院進学後から携わってきた「暮らしの研究、住まい方研究」についてご発表いただいた。これまでの研究において、住まい方の調査を通じて、多様な研究領域・専門家とのつながりが持てたことで研究が深められ、また、海外でも住宅研究がされており、若い研究者も多く、海外交流を通じて大いに刺激を受けているという内容の紹介があり、研究を進めるにあたり、幅広いネットワークの重要性が語られた。家庭経営・経済分野からは、武庫川女子大学の吉井先生にご講演をいただいた。勤務校の業務と研究会・学会活動の両立について紹介があり、家政学では生と死に関わる研究ができるところが魅力であり、消費者教育や家政学会の震災プロジェクトにも参加していること、10年後に活かされる研究をしていきたいと常に将来を見据えての活動内容が紹介された。被服分野からは、文化学園大学の柚本先生にご講演をいただいた。企業勤務時代に肌着の研究開発を行い、被服衛生学として温熱自律神経官能評価を行っており、それらの研究内容が紹介された。現在、被服分野は細分化されてきており、今後、家政学の研究として細分化された分野で協力して実施することが重要になってきていることなども語られた。食物分野からは、愛国学園短期大学の神田先生にご講演いただいた。管理栄養士養成課程を卒業後一貫して栄養学の分野の研究を行ってこられ、食べ物は誰にでも身近で研究題材として魅力的と感じ、研究を行っている。また、学んだことを日常生活で実践できる一方で、栄養バランスよく食事がとれている学生が少ないことから、力を入れておられる食育活動についても紹介された。体験的な学びの大切さに気付かれ、食育を英語で行ってきた内容なども語られた。

ディスカッションでは、予定時間を超え、活発に意見交換がなされた。「若手の会の活動について生活科学コンソーシアムなどを通して情報発信することも一法である。」との意見が出された。また、「家政学会の魅力、家政学でなくてはできないことは何か。」という質問が出された。この質問に対し講演者から「家政学には、生活に関わる要素すべてが含まれており、様々な分野で研究連携を取り、研究者に限らず一般市民との連携も取ることで、実生活に必要な内容を研究テーマとして取り上げることができ、研究成果を実践していけるというところに大きな意義がある。」「現在は分野が細分化しており、研究も細かな内容になってきている。家政学として、一つの目的に対し各分野の研究者がそれぞれの立場から取り組み、一つにまとめ、情報発信をしていくことが必要である。」などの意見が出された。

今後も家政学研究の発展のための交流の場となるように、若手の会の活動を推進していきたい。

なお、アンケート結果の詳細および若手の会の活動については、日本家政学会若手の会 HP (http://www.geocities.jp/kasei_wakatenokai) 上に公開している。

(若手の会幹事一同、 文責・棚村壽三)